

音読テキスト「日本の名文」

たかせがね

もりおうがい

高瀬舟 森鷗外

青空文庫を元としています
参考 .. ウイキペディア



たかせがね きょうと たかせがわ じょうげ こがね とくがわじだ、 きょうと さいにん
高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が
えんとう もう わた ほんにん しんるい ろうやしき よ だ いちまへ
遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いを
する(ゆる)を許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されるこ
とであった。それを護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心で、この同心は
さいにん しんるい うち おもだ いちにん おおさか どうせん はいか せうしん
罪人の親類の中で、主立った一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつ
た。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた、黙許であつた。
とうじえんとう もう わた さいにん もろろんおも とが おか みと
當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人
ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し火を放つたと云うような、獐惡
じんごう たすう し たかせがね の さいにん かはん いわゆるこころえ
な人物が多敷を占めていたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得
ちがひ おも とが おか ひと こころ ひ はな いわゆるこころえ
違のために、想わぬ科を犯した人であつた。有り觸れた例を擧げて見れば、
當時相對死といつた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男
とうじあいたいじ じょうし はか あいて おんな こころ じぶん い のこ おとこ
というような類である。

そういう罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずん
きょうと まち いえいえ りょうがん み ひがし はし かもがわ せい くろ
だ京都の町の家々を兩岸に見つづ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつ
た。此舟の中で、罪人とその親類の者とは夜どおし身の上を語り合う。いつもい
つも悔やんでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、
さいにん だ しんせきけんぞく ひさん きょうぼう じま でき しよせんまち
罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町
ぶせうしよ しらす おもてむけ こらきょう き やくしよ つくえ うえ くちがき よ
奉行所の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだり
する役人の夢にも窺うことの出来ぬ境遇である。
やへにん ゆめ うかが でき きょうぼう
同心を勤める人にも、種々の性質があるから、この時只只うさいと思つて、耳
おむ おも れいたん せうしん おむ また ひと あわれ み ひ
を掩いたく思う冷淡な同心があるかと思えば、又しみじみと人の哀を身に引
き受けて、役柄ゆえ気色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心
う やへがら けしき み むごん なか ひそ むね いた どうしん
もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に
こころよむ ばあこ ひじょう ひさん きょうぼう おぢい さいにん しんるい とく
心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになると、其同心は不覺の涙を禁
え じ得ぬのであつた。

森鷗外(もりおうがい)
一八六二年(一九二三年)小説
家。夏目漱石に並ぶ明治の文
豪。「山椒大夫」「舞姫」「雁」な
どがある。
文学博士・医学博士。陸軍軍医
總監となる。

「高瀬舟」は、鷗外の他の歴史
小説がそうであるように、歴史
的資料を基にして書かれてい
る。ここでの資料は、江戸時代
の隨筆集「翁草」である。
同心羽田庄兵衛は、遠島送り
になる罪人喜助の表情が、やけ
に明るく晴れ晴れとしている
のが気になり、そのわけを喜助
に尋ねる。

「自分は今までひどく貧しい
生活を送ってきたが、今は遠島
の際に、二百文のお金をいただ
き、ご飯も毎度食べることがで
きて、大変うれい」と、喜助
は答えた。また、弟を殺した罪
で遠島になったが、その詳細を
尋ねると、病氣だった弟が、み
ずから死のうとしていたのを、
手伝つたからだという。それが
人を殺したとして裁かれたわ
けである。庄兵衛は果たしてこ
れが殺人なのかと、自問する。

鷗外自身、この作品の主
題を「足るを知る(わずかな
ことで、満足すること)」と
「安楽死」であるとしている。

鷗外は作品末尾で、主人
公に「お奉行様の判断を、そ
のまま自分の判断にしよう
と思つた」と語らせながら
も、「腑に落ちぬものが残つ
ている」と続け、主人公の煩
悶(はんもん)を描いてい
る。

森鷗外が投げかけている
のは、「安楽死」だけでなく、
罪とは何か、人の価値とは
何か、命とは何かといった
多岐にわたる哲学的な問い
であつた。それゆえ、安易な
答えに至るよりも、その問
いを考え続けることにこそ
意味があるといえよう。